

“跋涉”への旅立ち

—— 蕭紅『商市街』抄訳¹⁾ ——

平 石 淑 子

『商市街』について

『商市街』（1936年8月、上海文化生活出版社）は、東北流亡作家の代表とされる女性作家蕭紅（1911～42）が、蕭軍（1907～88）と同居を開始してから東北を脱出するまでの様々な出来事や心象風景を記録した散文集である。『商市街』という書名は、二人が哈爾濱で初めて持った「家」が「商市街25号」²⁾にあったことによる。『商市街』をどう読むかについては既に「『牽牛房』をめぐって——蕭紅『商市街』より——」（『中国東北研究の広場』第一号、2007年9月、「満洲国」文学研究会）に書いたので繰り返さないが、『商市街』をはじめとする蕭紅の散文を自伝、事実の記録として読むことに疑問を持つ立場に変わりはないことをまず断っておく。

しかし、たとえ『商市街』に記されたことどもが事実そのままではないとしても、それらが彼らの実生活を背景としており、当時の哈爾濱における左翼文芸活動の一端を反映していることには疑いがない。「『牽牛房』をめぐって」では、当時左翼文芸運動の中心となった「牽牛房」に関わる四篇を訳出し、事実との対照を行った。本稿は蕭軍と蕭紅が東北を脱出するに至る経緯に関わる七篇を拾い、事実との対照を行いながら訳出し、前稿と併せて「満洲国」成立直後の東北における左翼文芸活動に関する資料の一つとしようとするものである。蕭紅たちの東北脱出に関しては、拙稿「蕭軍・蕭紅の東北脱出」（『植民地文化研究』第十一号、2012年7月、植民地文化学会）がある。本稿はそれを補足し、また同時にそれに補足されるものでもある。

作品集（冊子）³⁾

ランプの光がチラチラするものだから目が痛い。清書して、清書して……

「何千字になった？」

「まだ三千字ちょっと」

「手が痛くないか？ ちょっと休めよ。目も痛めるぞ」郎華⁴⁾はあくびをしながらベッドに行き、両手を頭の後ろに組んで、鉄のベッドの柵に寄りかかった⁵⁾。でも私は手を止めない。ペン先が紙の上で音を立てている……

金網を張った窓の外でひとしきり犬が吠えた。革靴が高く響き、何人かの足音が表門から近づ

いてくる。抑えようのない恐怖が私の胸を塞いだ。

「誰か来たわ、見て来て」

郎華が戸を開けると、李と陳成が入って来た。二人は劇団の仲間で、持ってきたのはきっと台本だ⁶⁾。私はそれを受け取るより前に、二人にベッドに座るよう勧めた。

「吟⁷⁾は忙しそうだね、また何か書いているの？」

「書いているんじゃないの、清書しているのよ」私は再びペンを取って清書続けた。

彼らの話が途切れ途切りに聞こえ、集中できなくなってきた。字は間違えるし、書き漏らすし、同じことを繰り返し書くし。

私の足を刺した蚊が、灯りの下でブンブンいい始めた時、私はとうとう書くのをやめた。

あらまあ、部屋中蚊だらけ！戸は開けっ放しのまま。子犬が一匹、ふらふら入ってきたと思ったら、しっぽを巻いて逃げ出して行った。戸を閉めても、蚊はまだ飛んでいる……私は痒くなった耳を掻き、腿やすねを掻いた……指の関節がふくれあがってきた。蚊にやられた所がすっかりだるくなっている手を休ませてはくれない。唇もふくれあがり、目のあたりも熱を持ってはれぼったい。こっちをボリボリ、あっちをボリボリ、手は全然役に立ちやしない。

「作品集はどう？」李の煙草が口元で煙を上げている。

「あてこの一篇だけだ」郎華が答える。

「表紙はどんな風？」

「表紙を待っている所さ……」⁸⁾

翌日、私も一緒に印刷所に行った。格別嬉しかったのは、きちんと折りたたまれた一冊一冊がどれも完成間近の作品集だったことだ。子供の頃、母が服を新調してくれた時よりもずっと嬉しかった。……字を拾っている職人のそばに行ってみると、彼の手の下にあったのはまさにその題名だった。大きな活字、四角い。何とも言えない感情が湧き上がった。それこそ私のあの「夜風」⁹⁾だったのだ。

あの日はその前にピロシキ¹⁰⁾を食べた。郎華が作品集のことで私をお祝いするのだと言う。そこでカウンターに行き、小さなグラス二つに「ヴォトカ」を注いでもらい、これは作品集のことであなたをお祝いするのよと言った。

大きな喜びに追いたてられて、私たちは子供に戻った！公園に行き¹¹⁾、大きな木の下で涼んでいると、公園が全てを満たしている所のように思えた。梢の上の空を眺めた。外国人の子供たちが足下の砂で遊んでいる。まだ午前中だったので、公園に来る人も少なかった。日本人の女性が傘をさして歩いている。「アイスクャンデー」売りの小屋ではコップを洗っていた。急に喉の渴きを覚えたが、ずらりと並んだ透明の発泡飲料の瓶には食指が動かなかった。私にはそういう習慣がなかったのだ。公園でああいったものを飲んだことがない。

「帰って何か飲みましょうよ」家に帰って飲めばお金がいらぬ。

表のドアを引き開けると、その拍子に麦わら帽が落ちてきた。水を飲むと、私は麦わら帽をかぶって川へ行こうと提案した¹²⁾。

足はむきだし、郎華がはいていたのは短いズボン、私がはいていたのは短いスカート、川へ出発だ。

漁師みたいな二人が、通りのショー・ウィンドウにちらちら映る。

「ボートに乗りましょうよ、いい天気じゃない！」川に着くとまた私が提案した。

「二十銭しか残ってないぜ……でも乗れるな、全部使っちゃおう！」

船底に青草を敷いた、オールが二本ついたボートを選んだ。船頭と交渉して一時間十五銭。行水するつもりはなかったから、そのための服も着ていない。船頭がとも綱を解いてくれ、私たちは川の真ん中に向かった。二本のオールがひるがえり、流れに沿って川下へと向かう。川岸が後ろへ下がっていくようだ。特に探したわけでもなかったが、たまたま砂州があった。一丈四方¹³⁾の砂浜が突き出している。まず郎華が勇敢にも砂浜に飛び下りた。私は臆病なので、砂浜が川底に沈むのではないかとびくびくしていた。

結局水浴びをすることになり、砂浜に服を脱ぎ捨てた。郎華は真っ裸になった。私は向こう岸で洗濯をしている人の顔が判別できないのを確かめてから、船の陰に隠れ、水の中に入ってようやく服を脱いだ。私はずっと砂浜の近くにいた。水の流れに持って行かれるのが怖かったのだ。川の波が船底を打っている。私は船につかまり、頭は水の上、体は水の中。水が輝き、空が輝き、この世から離れてしまったみたい。砂浜に寝転んで太陽を浴びていると、北から一隻の小舟がやってくる。私は慌てた。服を着るのはもう間に合わない。どうしよう？水に入ろう！船が通り過ぎると、私はまた水から這い上がった。

私は服を着たが、郎華はまだだ。彼は自分のシャツを探していた。シャツは洗って船にかけておいたと言うのだが、どうしても見つからない。遠くに白いものが浮いている。彼はあれがきっと自分のシャツだと言って、船をこいでその白いものを追いかけた。白いものはゆっくりと流れていたが、それは魚、死んだ白い魚だった。

シャツはなくしたが惜しくはなかった。郎華は上半身裸のまま、大声で叫び、大声で笑いながら魚をすくい上げた。たぶん彼は川で魚を捕まえるのも腕がなければできないと思っているのだろう。

「晩飯にこいつを食おう、焼いてくれよ」

「死んだ魚は食べられないわ、たぶん臭いがする」

すると彼は魚のえらをめくって見せた。「ほら、ほら、こんなに赤いのに臭うか？」

岸に上がる頃になって、彼はようやくおとなしくなった。

「どうしよう！上半身裸で、中央大街は歩けない」彼はすっかりしゅんとしてしまった。恐らくこの時、魚のことは忘れていたに違いない。

私は走って家にもどり、服を持ってきた。汗びっしょりだった。しかし彼は川岸で波止場人夫たちと一緒に茶を飲んでた。その傘みたいなテントの中には、川風が吹き込んでいた。彼が私に最初にかける言葉は、「暑いだろう？」だと思っていた。

しかし彼は私を気遣わずに、まず魚を気遣った。「魚をどこにおいた？冷たい水に漬けたかい？」

「五銭ちょうだい！」酢を買おうと思ったのだ。魚を焼くには酢がいる。

「銅貨一枚残ってないよ、お茶を飲んだからな、そうだろう？」

大きな喜びに追いたてられた二人は、有り金すべてを使い果たし、シャツを大河に失い、代わりに一匹の死んだ魚を得たのだった。

魚を食べようという時になって、郎華がまたこう言う。「作品集のために、君に魚をごちそう

しょう」

これは私たちの創作の一つの階段、一番初めの階段だった。作品集はこの階段を具現化するものだった。

8月14日、家々がお祭りの準備をしているその日¹⁴⁾。私たちは印刷所に行き、自分たちで装丁を始めたが、まる一日かかった。郎華は拳で背中を叩いていたし、私も背中が痛かった。

それから郎華が荷馬車を呼んできた。百冊をそれに載せ、夕日の中を、馬の首に下げた鈴を高らかに鳴らしながら、家路についたのだった。

家では、床に作品集を並べた。友人たちは作品集を手に取り、話題もその作品集のことだった。だが時を同じくして、作品集についての噂が聞こえてきた。没収されるぞ！日本の憲兵が逮捕しに来る！

逮捕はされなかったが、没収は本当だった。本屋に送った分は、数日もしないうちに発売禁止になった¹⁵⁾。

劇団¹⁶⁾

作品集は恐怖をもたらした。夕暮れ時、劇の稽古が終わって劇団の人たちと「民衆教育館」¹⁷⁾を出ると、その恐怖のせいで自分の家が心配になった。街灯がとまり、敷地に入る。劇団の人たちも私たちの後ろに続く。入り口の扉、窓、いつものように静かに閉まっている。私はすっかり安心した。家の中に悪いものが来ていないことがわかったから。

やれやれ、鍵は郎華が持っているのだった。そこで皆は窓の下の階段口に腰を下ろした。李が買って来たマクワウリ、皆でそれを食べた。

汪林¹⁸⁾がいつものように煙草を吸っている。カーテンをめくって私たちにほほえみかけた。陳成がマクワウリを一つ高く掲げた。

「要らないわ」彼女は首を振り、ガラス窓越しにそう言った。

私には何の興味もなかった。皆が公演についてあれこれ議論している間中、私はずっと一つ事を考えていた。皆に早く帰って欲しかったのだ。トランクを片付けなければ。トランクの中に私と郎華を犯罪者にするような何かが入っているような気がしていた。

皆が帰って行くと、郎華がベッドの下からトランクを引っ張り出し、床に蠟燭を立て、整理を始めた。床一杯に紙が散らばったが、犯罪に関わるようなものはなかった。しかし自信は持てなかった。本のどこかに「満洲国」を罵るようなもの、何かを罵る痕跡が残っているかもしれない。そこで本を一冊ずつ最後までめくってみた。整理が終わると、トランクはがらがらになった。ゴリーキーの写真一枚も焼き捨てた。ストーブの熱で顔が痛くなった。私はどンドン焼いた。日本の憲兵が今にも捕まえに来るかのよう。

坐ってお茶を飲もうという頃になると、もちろん気持ちも落ち着き、自信も生まれた。私は一枚の吸い取り紙を無意識に弄んでいた。腰を伸ばし、すっかりくつろいでいた。私の心は引き絞った弓を放った後のように緩んでいた。私は吸い取り紙に書かれた赤い鉛筆の文字をじっと見たが、それこそまさに法に触れるものだったのだ。

——小日本、走狗め、くそ「満洲国」……——

私は見直しもせず、すぐストーブに放り込んだ。

「吸い取り紙だぞ！吸い取り紙！」郎華は惜しがって地団駄を踏んだ。気が付いた時にはもう燃え始めていたのだ。「あんなに大きな吸い取り紙を燃やすなんて、熱で目がかすってしまったのか？何でもかんでも燃やしちまって、おい、どうするんだ！」

彼がその吸い取り紙をあまりに惜しがるので、見ていて腹が立った。吸い取り紙が大事な、それとも命をおもちゃにしたいの？

「一匹のシラミのために綿入れ一着燃やしちまうのか！」郎華は私を罵った。「文字を切り落とせばよかったじゃないか」

そうすればよかったんだ！本当に馬鹿だ。一つの傷のためにリンゴ一つ棄ててしまったのだ！

私たちは机の上に「満洲国」建国記念の絵はがきを並べた。それは友人がくれたもので、ダースもあった。それから表紙に「満洲国」という文字のある、何の本だかわからないのを二冊、中を見もしないで並べた。机の上はなかなか傑作だった。『離騷』、『李後主詞』、『石達開日記』¹⁹⁾、それから彼が家庭教師²⁰⁾で使う小学校の算数の教科書。『世界各国革命史』も机から下ろした。日本がどのように朝鮮を抑圧したかという歴史が書いてあるから外には並べられない、と郎華が言うのだ。私はそれを聞くなり、そんな大変なことがあるならすぐに焼いてしまわなければと思った。私はもう立ち上がっていたが、郎華が押しとどめた。「気でも狂ったのか？おかしくなったのか？」

灯りを消してベッドに入るまで、私は一言もものを言わなかった。息もできないような気持ちだった。暗闇の中で私は大きく目を見開いていた。敷地内の犬の声がかましくなり、表門がとてつもなく大きな音を立てた。結局、音を立てるものすべてがいつもより大きな音を立て、いつもは音を立てないものにも気づかされた。天井が音を立て、スレート葺きの屋根も風に吹かれて音を立てていた、ガタガタ、ガタガタ、……

郎華は私の胸を押さえた……ものも言えずにいる胸を。鉄の表門が大きな音を立て、私は飛び上がった。

「大丈夫だよ、俺たちに何がある？何もないじゃないか。噂を真に受けるな。ちくしょうめ、捕まえに来たらそれまでだ！お休み、寝不足だと、明日頭が痛くなるよ……」

彼は私の胸を押さえていた。悪い夢を見て飛び起きた子供のように、心臓が母の手の下で大きく鼓動していた。

ある日、ある映画館でリハーサルがあり²¹⁾、皆は私たちの小さな家から三々五々出発した。

皆はそろったのに、徐志だけがない。彼が来なかったことは一度もないのに。リハーサルが始まろうという頃になっても彼は来なかった²²⁾。皆は彼が病気になったのだと思った。

広い舞台に、美しい幕。私が演じるのはおばあさんだ²³⁾。泣かなければならないし、病気にならなければならぬ。四つの椅子を並べてベッドにし、そこに寝てみた。腰が当たって痛かった。

まず映画館の主人に見せたのは、郎華が扮した「こそ泥」²⁴⁾のジムと李が扮した弁護士夫人が対話する一幕だった。私は別の台本だったが、私の番にならないうちに、皆は映画館をあとにした。

条件が合わなかったの、公演はできなかった。皆はチャンスを待つことにしたが、各自疑問

を抱いていた。公演はできないのではないか。

三つの劇²⁵に三ヶ月かけたのだ。公演できなかつたらそれこそ残念だ。

「君たちの作品集の噂はどう？」

「何も。狼や虎を恐れているはだめだ。近頃は何かにぶち当たったらぶち当たった時のことだ……」郎華は強かった。

青ざめた顔（白面孔）²⁶

恐怖が劇団にのしかかった。陳成の青白い顔が月の光の下でいっそう青ざめた。その青さが、事件の深刻さを物語っていた。秋の雨のあとの道、足が石畳の上でピタピタと音を立てる。李、郎華、私たちの四人は長い道を歩いていた。李が、「徐志だけど、私たちがリハーサルをしたあの日、来なかったじゃない？逮捕されたなら一週間よ！まだわからないけど……」と言う。

「言わないで、外では言わないで」私は彼女の肩を揺さぶった。

あたりをはばかりながら、郎華と陳成が一組、私と李が一組になった。誰かが後ろから歩いて来ると、その人が私に注意を払うより先に、私がある人に注意を向けた。皆が私たちの今度のことを知っているような気がした。街灯がともったが、私たちはそれに気づかないまま、ただ緊張して歩いていた。

李と陳成が私たちにある知らせを持ってきた。劇団の柏さんがもう三日間家に帰れないらしい。スパイが家の前に見張っていて、彼は逃げる準備をしているという²⁷。

私たちはおデブさん²⁸を訪ねた。おデブさんには何か手があるかもしれない。「××科の中のことは完全に秘密で、このことについて僕は知らないし、まだ耳にも入ってこない」と彼は言った。彼は部屋の中をぐるぐる歩き回った。

家に戻って鍵をかけ、また本の片付けを始めた。片付けるようなものはもう何もないことはわかっていたが、本能的に片付けなければと思ったのだ。それからあの作品集も廊下から裏の薪小屋に移した。作品集を見ても全然嬉しくなかった。却って煩わしかった！

秦さん²⁹の顔も青くなった。それは翌日、町で彼に出会った時のことだった。私たちは何も言わなかった。郎華が既に彼にそのことを話していたから。

手はなかった。逃げるにしても旅費がない。逃げるって言ったってどこへ？不安定な生活がまた始まった。以前は餓えに悩まされたが、ようやく食べられるようになったら、今度は恐怖に悩まされる。これまで出会ったこともないような嫌な噂や事実が、全部この時に押し寄せた。日本の憲兵隊が一昨日の夜誰を捕まえ、昨夜は誰を捕まえた、とか……昨日捕まった人は劇団と関係があった、とか……

耳の中がそんなことどもでいっぱいになり、町に出ても不安でならなかった。中央大街の真ん中で、とうとう突然こんなことが起こった——郎華がやせた背の高い人に肩をつかまれ、その人について行ってしまったのだ！角を曲がって横町に入っていく。郎華も何も言わずにその人について行く。理由も判らないまま私から離れて彼について行くような感じ……私の視線はまず映画館の入り口にいる人々に遮られた。だが私は慌てなかった。その人と郎華はとても親しげに、肩を寄せ合ってこちらへ歩いて来る。しかし全く無表情のまま、また向こうへ行ってしまう……今

度は長いこと戻って来ない。これはどんな策略なのだろう。彼を毘にかけるともりだろうか。

結局彼を捕まえに来たのではなかった。彼の知り合いだったのだ。何ておかしな知り合いだろう！唐突すぎる！神経の細い人なら恐怖のあまりおかしくなってしまおうだろう。——何てことだ、危ないよ、君たちの劇団から二人逮捕者が出たんだ……町でその人は一風変わって見えた。その人は頻りに「君たちは準備すべきだ」と言った。

「何を準備するんだ？怖がったって何にもならない、出くわしたらそれまでだ」郎華は肩も揺らさずにそう言った。

ここ数日の間に起こったことは数え切れない。友人の編集者、陵³⁰も逃げた。汪林の酒を飲んで青ざめた顔が庭に現れた。彼女は一晚中飲んでいたのだと言った。陵が一昨日の夜、どうやって彼女を家まで送ったか、どうやって彼女に瓜の皮をむくナイフを取りに行かせたかを話した……彼女は話しながら夢の中にいた。顔は青白かった。悪いことが全部一度に起こったみたいだった。友人たちは変わってしまった。汪林も庭を行ったり来たりし、様子が変わってしまった。

メンバーの徐志がいなくなっただけなのに、劇団については恐怖の中で再び話題にされることはなかった。

再びの冬（又是冬天）

窓の外に降り積もった雪は白いピロードのよう。次から次へと降ってきて、一日中止まない。去年寒さにやられた足は完全に良くなった。でも今年は凍えはしない。暖炉がポツポツと音を立て、時折小さく薪のはじける音がする。ガラス窓に氷や霜が張り付いたままということもない³¹。薪は去年のように窓の外に積まれてはいない。薪小屋いっばいに詰め込まれている。

国に帰らなければだめだと心を決めた³²。いつ本屋へ行っても、雑誌は一冊もない。他の本にしたって、三年前にガラスケースに並べられたような色あせた古いものばかり。

行かなければ、行かなければだめだ。

友人たちに会うたびに私たちは尋ねた。

「海は何月だと波がない？船酔いはどんな感じ？……」私たちは二人とも海を渡ったことがなかったから、海の船の大きさは、絵で見ただけでも圧倒された。だから「万国車票公司」の前を通りかかると、必ずしばらく足を止め、ウィンドウに立てかけてある大きな絵を眺め、その船がどれほど大きいかを考えてみるのだった！海の上は風がなくても一メートルの波があるという。私はガラスの上から手で測ってみた。船は波の何倍高いのだろう。結果はかなりの差だった！船の高さは波の二十倍もあったのだ。海を行く船は二十メートルの高さだと私は言った。

「二十メートルもあるか？」郎華は納得せず、自分でも測ってみた。「ふん！そうさ！だいたい……波が一メートル、船の高さは八メートル弱」

「そんなにある？ないわよ！あるかしら！」私の見立てが変わることもあった。

だから郎華はそれを聞くと怒り出す。船のことで町ではしょっちゅう言い合いをした……

しかし友人たちは私たちが行こうとしていることを知らなかった。ある日、私たちがおデブさんの家で酒を飲んでいる時、焼いた鳥をほおぼっている時、郎華がそれを言おうとしたのだが、

私が止めた。しかし結局は言ってしまった³³⁾。

「行くのがいい！君はとっくに行くべきだと思っていた！」以前からおデブさんはしょっちゅう「郎華、行けよ！僕が旅費を少し出すから。僕は毎日××科で取り調べを聞いている。鞭が大きな音を立てるんだぜ！ああ！行くんだ！もし僕の友人もそうなったらと思うと……それをどうやって聞いていられるか。そういう人を見る度に、僕は君のことを思い出すんだ……」と言っていたのだ。

秦さんが来た。彼は真新しい外套を着て、帽子も新しそうに見えたが、何も聞かないうちに、自分からしゃべり出した。

「僕の新しい外套を見ただろう？上海に行かなきゃだめだ。急いで服をいくつか新調したんだ。質屋に行くにもいいだろう、少しでも新しければいくらかにはなる……」

これを聞いて、私たちも嬉しくなり、話さずにはいられなくなった。「俺たちも行くんだ。行かなきゃだめだ。ここで生きたまま皮をはがれるのを待っているのか？」郎華はそう言うと、笑った。「君はいつ行くの？」

「じゃあ君たちは？」

「まだ決めてない」

「行くなら五月か六月だ、波が穏やかだから……」

「それなら一緒に行こう！」

秦さんは私たちが本当のことを言っているとは思っていなかった³⁴⁾。皆はそれぞれに行くことについて、あれこれ話した。どうやって行くのか。途中で検査があるかもしれない、尋問もあるかもしれない、上海には友人は誰もいない、金もない。だんだん興奮してきて、真に迫ってきた！イメージがわきあがってきた！秦さんは上海に行ったことがあったので、四馬路がどんな風かを話した！上海の貧乏人はどんな風に貧乏かを……

彼が帰ったあとも雪は止まなかった。私はストーブにまた薪をくべた。また夕食の支度をする時間だ！私は去年のことを思い、今年のことを思った³⁵⁾。自分の少しふくれた指の関節を眺めた。背の高さは変わらず、痩せ具合もこんなものだったけれど……

この家は隅々までわかっていて。壁や天井に余計な釘が何本打ってあるか、私は全部知っていた。郎華は？痩せも太りもせず、以前のまま、私が彼を知ったあの時から、彼はそのままだった。頬骨が高く、目は小さく、口は大きく、鼻は柱のようだった。

「飯は何？うどん？米？」

私たちには確かに米も粉もあった。これは去年とは違う。突然そういった思い出が私を引き戻した……二十銭か十銭を借りたはずなのに……彼は手ぶらで戻ってきた……新しい綿入れを抱えて質屋に行ったっけ³⁶⁾。

私は凍傷にかかった足のことを思い出し、無意識のうちに足を見た。そしてまた薪のことを思った。あんなにたくさんの薪、燃やしてしまおう！そして更に薪を運び込んだ。

「戸を閉めろよ！寒い！」郎華が怒鳴った。

彼は両手をズボンのポケットに突っ込み、まだ部屋の中をぐるぐる歩き回っていた。行く話になると、彼はしきりに歩き回った。三十分歩き回るのもいつものことだった。

秋、私たちはもう電灯を付けていた。私は電灯の下で自分の原稿を書いていた。郎華がまた出

て行った。彼は遊びに行くのだ。これは去年とは違う。今年彼は家庭教師をしに行かなくなった。

門の前の黒い影（門前的黒影）

昨夜から、大きな音を立てる鉄の門がより恐ろしく感じられるようになった。鉄の扉が音を立てると、廊下に飛び出して様子を窺う。何回見ても全部違った。違って欲しい。朝になった。ある学校の学生、彼は郎華の友人だったが、学生帽をかぶり、中に入ってもそれを脱ぎもせず、座りもせずにこう言った。

「噂が芳しくない、君たちについてだ、僕たちの友人が一人やられた」

「いつ？」

「昨日。学校はもう冬休みになっていたが、彼は家に帰るかどうかが決めていなかったんだ。今朝になってまた日本の憲兵が来て、宿舎中を検査した。ベッドを全部ひっくり返したら、『戦争と平和』が一冊出てきた……」

「『戦争と平和』が何だっていうんだ？」

「用心したまえ、誰かが君に目を付けているらしい」

「俺は反満でも抗日でもない、何を恐れるんだ？」

「そういうことは言うな、何でもかんでも捕まえるんだ、考えても見ろ、『戦争と平和』を持って行って調査するって、一体何を調査するんだ？」

そう言うのと彼は帰って行った。目を付けているのが誰だと思うかと聞いたが、彼は何も言わなかった。しばらくしてまた一人やって来た。同じように慌てていた。近頃は誰もが慌てているらしい。

「君たち身を隠せ、まずいぞ！世間では劇団がよからぬものだと噂されている、あのメンバーは出てきたか？」

私たちは彼を送りがてら、公園をぶらぶらした。凍った池では子供たちがスケートをしていた。日本の子供、ロシアの子供……中国の子供……

私たちは凍った池を一回りしたが、少しも楽しくなかった……だからお互いに何も言わず、鬱々と歩いた。

「夕飯は麺にしよう！」彼が道の北側のうどん屋を見てようやく口を開いた。私は中に入ってうどんを買った。

家に帰ったが、本も読めないし、ロシア語の勉強もできない³⁷⁾。そろそろ夕食の準備でも始めようか！食事の準備をしても楽しくない。何を食べても楽しくない気がする。

棚の塩壺には白い塩がいっぱいに入っている。塩壺の横には干しエビの袋がある。醤油の瓶やお酢の瓶、油の瓶、それからよく炒めた肉味噌の瓶。部屋の隅には米の袋と粉の袋、薪小屋には薪がいっぱいに積み上がっている……これらを見ても満足感はなかった。肉味噌をうどんにかけて食べたが、去年ご飯に塩をかけて食べた時の方がおいしかった。

「商市街」の入り口で、私は一つの人影を見た。それは普通の人ではなかった。日本の憲兵のような。私はそのまま歩いて行った、郎華だとわかったら、と思うと怖かった。

八歩、十歩、だがもう歩けない！その革のブーツを履いた人は鉄の門の外を歩き回っていた。

私は立ち止まり、よく観察しようとした。郎華も私と同じで、とっくにその人に気づいていた。逃げよう、彼は門のところで私たちを待っている！間違いなし、道の南側には「オートバイ」が止まっていたし、それにその日本人は道の南側に歩いて行く。そのようすから、彼が耳をそばだてていることがわかった。

家には要らない、逃げよう、でもどこへ？

その日本人はサーベルも下げてはいなかったし、他の武器も持っていなかった。彼が人を捕まえに来たとは信じがたくもあった。私たちは道の南側のパンと洋酒の店に入り、パンを一つ買った。腸詰めを買うつもりはなかったが、主人が腸詰めに切り分けてくれた。私がガラスの向こうに注意を奪われていたからだった。そのサーベルを持たない日本人はくると向きを変えてゆくと立ち去った。

これは本当に一大笑い話だった。私たちは店で三十五銭を使い……ガラス張りのドアを出た。三十五銭分のパンと腸詰めに抱えて。もっとたくさんの金をその時町で失っても、惜しいとは思わなかった……

「こんなもの買ってどうするの？明日靴下が買えなくなっちゃったわ」事が過ぎ去ると私は悔やんだ。

「俺だって知らないさ、誰が君に買えって言ったんだよ？誰も恨めないだろう？」

郎華が先に立ってガタガタと戸を開けると、部屋の中の熱気が顔を打った。

決意（決意）

行かなければだめだ。周囲は静かにはなってきたが、行かなくては。何月に出発する？五月にしよう！

今からまだ五ヶ月ある³⁸⁾。灯りの下で何度も計画を練った。友人の誰々はいくら都合してくれるだろう、友人の誰々は旅費の半分を出してくれるはず³⁹⁾。……

気持ちの上では、出発のことを考えるとわくわくもするけれど、また悲しいことでもある。お茶をつぎながら私の手は震えていた。

「流れて行こう！哈爾濱も家じゃない。なら流れていこう！」郎華は湯飲みを手にしたが、口もつけずに下に置いた。

涙が既に私の中に充ち満ちていた。

「何が悲しいんだ、行こう！俺がそばにいるんだ、どこへ行っても心配は要らない。何が悲しいんだ、悄⁴⁰⁾、泣くなよ」

私はうなだれて言った。「このお鍋や茶碗はどうするの？」

「子供だなあ、鍋だの茶碗だの、何だって言うんだ」

私もつい笑ってしまった。自分がおかしかった。部屋の中をぐるっと回ったが、でもやっぱり悲しかった。そこでまたうなだれた。

劇団の徐さん⁴¹⁾は出られないんじゃないか？冷たい水を流し込まれているんじゃないか？私はその場所を思い、その人を思った。連れて行かれ、冷たい水を注ぎ込まれ、革の鞭で叩かれ、それはもう人ではなくなっていた。行こう、行かなくてはだめだ。

最後の一週間（最後的一星期）⁴²⁾

雨があがり、私たちはぬれた道を歩いていた。中央大街をうろうろし、川に行く？それとも向こうに行く？

空の雲は晴れもせず、町に行く人々もまばらだった。思いのままに歩いて行こうとしたが、もう歩けなかった。

「郎華、私たち日を決めなければ。いつ出発する？」

「今日は三日だから、十三日にしよう！まだ十日ある⁴³⁾、どう？」

私は突然足を止めた、びっくりしたように。哈爾濱が私たちと別れようとしている！あと十日、十日より先は、私たちは汽車の上、海の上、松花江にはもう会えないのだ。「満洲国」が存在する限り、私たちはもうこの土を踏めないのだ。

李と陳成も来た。私たちは出発するのが当然であるらしい。

「あと七日ある、出発すれば大丈夫だ！」陳成が言う。

私たちが出発するので、張さんが食事に呼んでくれた。食事が終わってから、また公園を散歩した。公園ではまたアイスクャンデーを食べたが、何とも言えない味がした。公園の大木、公園の夏の日の風、土、草花、池、築山、山の上のあずまや、……それらすべてがいつもとは違っていた。私は以前のように公園を走り回らず、静かに歩いた。足下の土がゆっくりと音を立てていた。

夜は家の中に私一人が残された。郎華の学生⁴⁴⁾が窓の外にやって来て、こっそり私を窺っている。彼は窓の外を行ったり来たりして、ぶらぶらしているふりをしながら私を観察し、この部屋の中を観察している。観察してもよくわからなかったらしく、質問してきた。

「先生はどちらに行かれたのですか？」

「何の御用？」

「授業をしていただきたいのです」

実際その子はいつもは授業をやりがらなかったのだが、先生の家が何かおかしいと思っているのだ。どうしてこのところ物を売り始めたんだろう、古い綿とか、古い皮の敷物とか……

引越そうとしているんだ！だがその子はそれがどういうことか、つかみかねていた。彼は戻ると女中の小菊⁴⁵⁾まで連れてきた。その女の子は彼と同じくらいの歳で、もちろん彼女もここが何か怪しいと思っていた。私は灯りを消した。片付けものをしたかったのだが、しばらくはそれもやめることにした！

ベッドに横になり、壁を撫で、ベッドの縁を撫でた。今私がまだこうして触っているものたちと、あと七日たったら、この全部と別れるのだ。

鍋や水差しがとうとう古道具屋に持って行かれた。古道具屋の手の中で音を立て、光を放ちながら、出て行った！あれは一昨年冬、郎華が古道具市で買って来たものだったが、今またそこへ戻っていった⁴⁶⁾。

水差しを売ってしまった。私は更に気持ちを抑えきれなくなった。歩いているのが自分の足ではないみたいだった。薪小屋に行き、たくさんの薪がまだ燃やされずにあるのを眺めた。売ろうか、それとも友達にあげてしまおうか。ドアの陰にはまだ電気ストーブと、それから履き古しの

靴があった。

かまどから鍋が消え、壺が消え、もう台所の体を為していない⁴⁷⁾。

一週間のうち、もう四日が過ぎた。時間が経つにつれて気持ちはよりざわざわしてきた。もう家で食事のしたくもできなかったので、外で食べたり、友人の家で食べたりした。

よその家の鍋を見ると、売ってしまった鍋が思い出され、食事をしていても心が騒いだ。その後、床についても心が騒いだ。

「明日朝六時には起きてベッドを出すからな、早めに起きろよ」

郎華の言葉に、出発が迫っているのだと実感した！どうしても出発しなければならないのだ。郎華が言わなければ行かないことのできるような気がした。

夜、眠ろうとしてもよく眠れなかった。太陽が顔を出さないうちに、鉄の表門が音を立て、私は身を縮めた。その音に心を取られてしまったかのように、ぼんやりと起き上がった。郎華はすぐにベッドから飛び下りた。二人でベッドから掛け布団や敷き布団を引きずり下ろした。枕が足下に落ち、散らかり放題。誰かがドアを叩き、庭で犬が吠え立てた。

馬の首につけた鈴が窓の外に響き、こんな朝は過ぎていった。災難に遭ったかのように、部屋の中はがらんとしていた。

私は荷物を広げ、床の上に横^{ゆか}になった。何日にもわたる病と不安で、体が弱り、もう起きていられなかったのだ⁴⁸⁾。郎華は川へ自分のシャツを洗いに行った。戻って来て私がまだ起き上がらないのを見ると怒りだした。

「いつもいつもぐだぐだして。起きて、片付けろ。とりあえず身の回りのものをまず持って行くぞ」

「何を片付けるの、もう全部片付けたわ。もう少し寝ていたい。まだ早いし、昨日は眠れなかったから」足は痛かったし、腰も痛かった。また病気になりそうだった。

「寝たいなら、きれいに片付けてから寝ろ。起きろ！」

床に敷いた荷物も片付けた。壁が四方からまっすぐ下に降りている。天井のちょっと黒ずんでいる所は、長いこと蠟燭でいぶされた所だ。話し声が少し反響した。空っぽになった！歩いてみると、部屋は広々としていた……

そして最後の朝食——パンと腸詰めを食べた。

私は手に荷物を提げた。郎華が言った。

「行こう！」彼がドアを押し開けた。

それはまさしくこの家に引っ越してきたときに郎華が「入ろう！」と言ったのと同じだった。ドアが開き、私は外に出た。足が震え、心は重く沈んだ。これまでこぼれなかった涙を抑えきれなかった。今こそ泣く時だ！涙を流すべき時なのだ。

私は一度も振り返らずに表門を出、家に別れを告げた！車、通行人、店、歩道の脇のポプラの木。角を曲がった！

さようなら、「商市街」！

荷物を腕にかけ直した。私たちは中央大街を南に下った⁴⁹⁾。

注

- 1) 訳出に際しては初版のリプリント版（香港波文書局）を使用した。
- 2) 現在の「紅霞街」。中央大街と交差する西五道街の向かいを西に入った所である。彼らの住まいは大家（汪家）の管理する敷地の中にあり、敷地の入り口には鉄の門があったようだ。「夜のこと、食事中に門番がやってきてこう告げた。『外にお客さんが来ていますよ』」（『商事街』『雪の日（飛雪）』：以後『商事街』収録の散文は、初出の時のみ訳題の後に原題を示す。ただし訳題と原題が同じ場合は訳題のみを表示する）。しかし筆者が1981年に訪れた際に門があった記憶はない。二人が住んだ「家」は半地下の狭い空間で、窓からは外を歩く人の足が見えていた。なお、初版本では「商事街××号」（「引っ越し（搬家）」）である。
- 3) 原載は『中学生』66（1936年6月）。文題の「作品集」は、蕭軍と蕭紅の最初で最後の共著『跋渉』（1933年10月、哈爾濱五日画報社）を指す。『跋渉』は当時の哈爾濱における左翼文芸活動のいわば金字塔であったが、そうであったために当局から発禁処分を受け、二人が東北を脱出する契機となった。『跋渉』には蕭軍の作品六篇と蕭紅の作品五篇を収録する。『跋渉』については拙稿「蕭紅の初期作品に関する考察——『跋渉』について」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第四号、1985年4月）がある。また蕭紅に関する全般的な考察として拙著『蕭紅研究——その生涯と作品世界』（2008年2月、汲古書院）がある。
- 4) 蕭軍のこと。『商事街』では一貫してこの名前で呼ばれている。
- 5) 「借り物の鉄製のベッドは、戸口からも入らなかったし、窓からも入らなかった。入らなかったら本当に床で寝るの？裸のまま寝るの？何を敷くの？／『先生、斧で叩けば』長靴を履いた男の子（大家の息子の汪玉祥、蕭軍が家庭教師をしていた：筆者）が斧を見つけてきた。／鉄製のベッドは立てられ、入口をふさいでいた。外に出すこともできなくなると、郎華が斧で殴りつけた。鉄が鉄に当たって大きな音を立てた。ドア上のガラスが二つに割れた。結局ベッドは中に入り、むき出しのまま床の真ん中に置かれた。それから大家さんから机一つと椅子二つを借りてきた」（「引っ越し」）。このベッドは二人が商事街の家を出る日の朝、売られる（「最後の週間（最後一個星期）」）。
- 6) 「劇団」は星星劇団である。「李」は他の文章から女性、恐らく白朗であろうと思われる。「李」が白朗なら、「陳成」は羅烽である可能性が高い。星星劇団が選んだ演目として、シンクレア「二階の住人——こそ泥（原題は“The Second-Story Man”：1909年に書かれた一幕劇）、白薇「おばさん（嬢嬢）」、張沫元「代を下ればより悪くなる——技術者の息子（一代不如一代——工程師之子）」がわかっている。張沫元は1925年に瀋陽及び黒龍江省の作家たちを集めて結成された新文学の団体「春潮社」の同人であった（『黒龍江文学通史』2002年、北方文芸出版社）。

「シンクレアの物語や戯曲における人物配置には、（一）金持ち、（二）彼の悪を知るその娘や妻、（三）社会主義に通じている正義の側の人、という図式がある。（中略）社会主義劇をはっきりと意図した『二階の男』The Second-Story Man（1909）では、前述の人物配置の（三）に当たるジムが二階の男すなわち押し入った泥棒である。（一）の金持ちは帝国鋼鉄会社の弁護士オースティンで、当然会社の利益を守ることが仕事である。ジムはかつてこの「不慮の事故が多い」職場での炉の事故で片目を失明した。そのときオースティンが彼を騙して棄権証に署名させ、その結果ジムは仕事も妻子も失い泥棒に転落し、その初仕事として真夜中に奇しくもオースティンの家へ押し入ったのである。（二）のオースティンの妻ヘレンに見つかり請われるままに事情を話すと、オースティンも出て来る。妻は夫の行為を責めるが、それはいわば資本主義の非を咎め、その一員である自分の不幸を嘆くものであった。ジムも資本主義制度という言葉こそ使わないが、ヘレンらの不幸も自らの悲劇も「階級」から発していること、社会の仕組みそのものが食う階級と食われる階級があるようにできている、ということには気づいている。（中田幸子『アプトン・シンクレア——旗印は社会主義』1996年、国書刊行会）

- 7) 蕭紅のこと。蕭紅の筆名の一つ「悄吟」に由来すると思われる。
- 8) 蕭軍『『跋渉』第五版前記』(1981年12月3日)は表紙について次のように書いている。「この本の表紙はそもそも金剣嘯に依頼したのだ。山と水がデフォルメされたもので、山は黒のピラミッドのような形、水は銀色の曲線、それらはすべて表紙の三分の二の所に横たわった五センチ程の幅の帯の中に描かれ、その下に「跋渉」という二文字と二人の署名がある。書名は始めは「青杏」だったが、最後に「跋渉」に決まった。しかしこの表紙は作り始めてみるととても複雑だったのでやめてしまった。結局一枚の木の板を見つけてきて、植字室で、校正用の赤い付けペンで、その場で私がささっと前に述べたようないくつかの文字を書き、それを表紙としたのだ」
- なお、「青杏」は蕭紅の詩「たまたま思い出して(偶然想起)」に見える言葉である。「去年の五月／北平で青杏を食べていた、／今年の五月、／私の生活の苦しみは、／青杏のような味がする！」
- 9) 1933年8月27日の日付がある。初出は『大同報・夜哨』6期～8期(1933年9月24日～10月8日)。貧しい母子が雇い主の地主から解雇され、ついに「×××」に加わって地主を打倒する、という話で、原文の伏せ字は、岡田英樹『『夜哨』の世界』(『〈外地〉日本語文学論』2007年、世界思想社)によれば「共産党」であるという。
- 10) 原文は「外国包子(外国の饅頭)」。
- 11) 「公園」は二人がよく散策していた近くの「兆麟公園」であろう。
- 12) 「川」は松花江。「夏の夜(夏夜)」(原載は《国際協報・国際公園》1934年3月1日)に大家の娘汪林(注18参照)と三人で、また次には陳成(注6参照)ら総勢六人で松花江へ水浴びに行ったことが書かれている。この六人の中には汪林と後に彼女の恋人となる陵(注30参照)も含まれていた。
- 13) およそ十平米余。
- 14) 「いよいよ装丁が始まりいざ完成という時が、ちょうどその年の中秋節に当たっていた。労働者たちは三日間休みになる。我々は本のできあがる日をただ首を伸ばして待つてはいられなかったので、ついに職人から手ほどきを受け、自分たちで装丁をして完成させた。(中略)印刷所全体が薄暗く、がらんとした大きな部屋の中に私と蕭紅の二人だけだった。千枚通しを打ちながら頁を数え、糊を塗り……とうとう我々は百冊を装丁し終えた。馬車を一台雇い、我々の火のように熱い、勝ち誇った若い二つの心を乗せて家に戻った。その夜のうちに何人かの友人たちにできる限り送った」(蕭軍『『跋渉』第五版前記』)。印刷されたのが千冊という説(陳涓)もあるが、当時の彼等の資力と出版事情を考えると千冊では多すぎる。蕭軍は、友人たちが一人五元を「株」として出資してくれ、舒群が生活費の三十元を、陳幼寶が十元を出し、端数は出版社がまけてくれてようやく出版費用の百五十元が調達できたといっている(『『跋渉』第五版前記』)。
- 15) 1946年、蕭軍が偶然古本屋で『跋渉』を見つけ(1979年版の扉に書かれた蕭軍自身のメモによる)、1979年になって黒龍江省文学研究所からリプリント版が出版された。
- 16) 初出は『中学生』66号(1936年6月)。「劇団」は星星劇団。
- 17) 「民衆教育館」は「民国19年(1930年)創立以来国民思想の善導、職業教育に相当の成績を挙げ、国文研究会、日満事情研究会、問学所、代書所、針織研究会、商業指導会、芝居、音楽研究会等を組織」(康德2年=1935年版『満洲国現勢』：満洲国通信社)していた。また周慧梅『近代民衆教育館研究』(2012年、北京師範大学出版社)は民衆教育館の設立について、南京国民政府成立後の新たな政策によるという説と、民国成立以後設けられた通俗教育館を前身とするという、二つの説があるとする。同書が付す「民衆教育館暫行規定(抜粋)」(1932年2月2日)によれば、各省市、県市には社会教育の中心機関として民衆教育館を、原則として県は一ヶ所、市は各市に少なくとも一ヶ所設立することが定められ、それぞれ省の教育庁、市の教育局の管轄下に置かれるとされている。同第八条にはその業務が次のように細かく定められている。

- 1、閲覧部：書籍、雑誌、図表、新聞の公開閲覧、巡回文庫、民衆書報、閲覧所等
- 2、講演部：定期講演、臨時講演、巡回講演、扮装演説及びその他の宣伝

- 3、健康部：体育に関するもの：器械運動、球技、トラック競技、伝統武芸、水泳、児童遊戯及びその他の運動。衛生に関するもの：生理、医薬、予防、清潔等
- 4、生計部：職業指導及び紹介、農事改良、合作社の組織等
- 5、遊芸部：音楽、幻灯、映画、演劇、評書（講談）、囲碁、各種の雑技及び民衆茶園（大衆芝居か：筆者）等
- 6、陳列部：標本、模型、古物、書画、写真、図表、彫刻、工芸、各種産物、博物館及び革命記念館等
- 7、教学部：民衆学校、青空学校、民衆問字所（文字を読む或いは代筆する所か：筆者）或いは案内所及び職業補習学校等
- 8、出版部：日刊、週刊、グラフ誌、パンフレット及びその他の社会教育刊行物

以上の業務は各地方の必要に応じて選択して設置することができたようだ。哈爾濱の民衆教育観は道里三道街にあったことがわかっているが、いつ設置されたのか、また上記の何れの業務を行っていたのかなど、詳細は分かっていない。

- 18) 蕭紅の哈爾濱第一女子中学の同級生で、彼等の住んだ家の大家の娘だった。大家の息子からは「三姐（三番目の姉さん）」と呼ばれている。しかし蕭紅はこのように書いている。「私は彼女を全く知らなかった。彼女の方は在学時代ほとんど毎日私を見かけたそう、運動場とか講堂とかで。私の名前を彼女はよく覚えていた。（中略）彼女はパーマをかけ、口紅をつけ、私よりも少し年上に見えた」（「引っ越し」）。汪林はこの後も度々登場する。「大きな毛皮の襟と高い音を立てるハイヒールが似合っていた」（「彼の口に霜がつく（他的上唇掛霜了）」）、「パーマをかけた人々の中に中国人も交じっていたが、僅か七分の一か八分の一ほどだった。しかし汪林はその中にいた。私たちはまた彼女に出会った。彼女はもう一人と一緒にだった。彼女と同じように美しく装った、色白の女性と歩いていた……パーマをかけた人はロシア語で話していて、とても美しかった。彼女もロシア語で話し、彼等と一緒に笑っていた」（「春が梢にかかる（春意掛上了樹梢）」）、「私たちの家の窓は汪林の部屋の窓の向かいだった。中では胡弓の音がしていた。あれは汪林が弾いている胡弓だ」（「公園」）。
- 19) 『離騷』は戦国時代の楚の政治家、屈原の作品。李後主は五胡十国時代の君主で文芸に優れた。石達開は太平天国の指導者の一人。
- 20) 郎華は生活のために家庭教師を始めている（「家庭教師」）。彼は家の外に「武術指南、毎月五元」という張り紙を出していたらしいが、武術以外でも厭わず教えた。「郎華は金のためなら、僅かの収入のためなら何でも引き受けた」（「来客」）。しかし家庭教師の仕事がない日曜日になると五銭のパンも買えなかった（「籠を下げた人（提籃者）」）。「借金」「借金」、郎華は毎日「借金」をしに出て行った。彼が借りてくるのはいつもとても僅かだった。三十銭とか五十銭とか、一円借りてくることはほとんどなかった（「黒パンと塩（黒列巴和白塩）」）。葉君『從異郷到異郷——蕭紅伝』（2009年、中国社会科学出版社）は、『国際協報』の編集者で二人の友人でもあった裴馨園が、自らの名義で《哈爾濱公報》（1932年11月13日）に、「友人酡顔君（蕭軍）が文学及び武術の家庭教師をする」という広告を出したとする。彼等の家主の息子が郎華の生徒だったことは既に述べたが、ここに訳出した「作品集」の一つ前の章（「家庭教師は強盗（家庭教師は強盗だ）」）では、ある日郎華が家主と呼ばれ、心配になった吟が窓の下で聞き耳を立てるという場面がある。中には日本人がいるらしい。彼女は作品集のせいかと疑う。「検査を経ていない小説集が日本人に知られてしまったのかもしれない！」どうも家主の所に、郎華はお前の息子を誘惑しているというような告発状が届いたらしい。それからしばらく、家主の息子は二人の家に寄りつかなくなったという。ここでいう「小説集」は『跋渉』を指していると思われるが、『跋渉』出版の経緯に関しては専ら次の章に書かれており、ここからも『商市街』収録の散文が必ずしも時系列に従わないことがわかる。
- 21) 民衆教育館長の満洲国承認記念日（9月15日）における公演依頼を断ったため、劇団は民衆教育館を使用できなくなった。「映画館」はその代替として考えられたものであったと思われる。葉君によ

- れば羅烽が「巴拉斯影院」に交渉したが、断られたという。結局上演の機会を得られないまま、メンバーから逮捕者を出したことをきっかけとして、劇団は解散する。
- 22) 徐志は「一代不如一代」で主役を務めることになっていた。『商市街』ではほとんどの人物が仮名で描かれているが、徐志だけは仮名にされていない。
- 23) 蕭紅は白薇「嬢嬢」で病気の老婦人を演じ、舒群が主婦の夫を演じた。
- 24) 注6参照。弁護士夫人を白朗が、弁護士を劉毓竹が演じたことがわかっている。
- 25) 注6参照。
- 26) 初出は『中学生』66号（1936年6月）。
- 27) 蕭軍「未完成的構図」（1936年9月）に、家の前でスパイが張っているため、Pが三日間家に帰れずにいるという記述がある。
- 28) 蕭軍の東北講武堂時代の友人（蕭軍「蕭紅書簡第二十一信注」：『蕭紅書簡輯存注釈録』1981年1月、黒龍江人民出版社）で、牽牛房の住人であった、香坊警察署署長の黄田（黄之明）を指していると思われる。「新識（新しい知り合い）」で「太った将校のような人」、「牽牛房」で「太った友人」と描写されている人物と同一人物であろう。黄田は自身の職業を利用して牽牛房の仲間たちの身の安全に気を配り、また蕭軍、蕭紅の東北脱出を援助した。
- 29) 「看板描きの夢（広告員の夢想）」（原載《中学生》63号、1936年3月）は金劍嘯が自分の生活と同志たちの生活を支えるために設立した「天馬広告社」について書かれたものと思われるが、そこに「秦さん」が登場する。ある日、郎華と吟の二人は中央大街でひょろりと背の高い秦さんに出会う。「下を見ると、秦さんの革靴に色とりどりの斑点がついているのが見えた。／『あなたの靴、どうしてペンキがついているの？』／彼は映画館に看板を描きに行っているのだと言った。彼は目の前の映画館がそれだと言う。『仕事がとても忙しいんだ。四時に仕事が終わると、五時には看板を描きに来る。ちょっと手伝ってくれないか』」次の「再びの冬（又是冬天）」で上海に行ったことがあると言っていることから、「秦さん」は金劍嘯であると思われる。金劍嘯は1929年から31年にかけて、上海で美術を学んでいる（劉樹声・里棟編「金劍嘯年譜」：『金劍嘯集』2011年、黒龍江大学出版社所収等）。
- 30) 「公園」で、二人はある新聞社の編集者に偶然出会う。彼は大学に入るために遠方に行くと言う恋人への思いを断ち切りがたく、煩悶している。続く「夏の夜」で、郎華と吟は陳成、その夫人（恐らく李）、汪林と、陵という、恐らく公園で出会った編集者の友人（「公園」でも「夏の夜」でも彼は小太りだと描かれている）を誘って川へ遊びに行く。そして「初対面」の汪林と陵をわざと二人きりにし、それをきっかけに二人が恋に落ちたことが書かれている。
- 31) 「夕食の仕度の時、薪は一本しか残っていなかった。（中略）／靴下を脱ぎ、布団の中で足を縮めた。自分の足を自分の腹の上で暖めようとしたのだ。でも駄目だった。足が長すぎた。本当にどうしようもない。足なんか何の役にも立たない。布団の中でも震えが止まらない。窓の霜がもうあんなに厚くなっている。（中略）二人の息が煙のように立ち上った。ガラスについた霜は川面に落ちた柳絮みたいに、びっしりと毛羽立っていた」（「最後の薪（最末の一塊木杵）」）。
- 32) 「満洲国」となった東北から関内（中国）に帰るということ。
- 33) 蕭軍と蕭紅が哈爾濱を離れるに至った経緯については既に「蕭軍・蕭紅の東北脱出」に書いたので、詳細はそれに譲るが、そこに筆者はこのように述べた。「少なくとも1933年秋の段階で蕭軍には東北脱出の意志はなく、また袁時潔（黄田の当時の妻）の回想によれば、舒群が東北を脱出した翌年3月の時点でもその意志はなかったことになる。（中略）彼等が東北脱出を決意したのは実行の間際で、しかもそれには地下党が何らかの形で関わっていたようだ」。
- 34) 不穏な情勢を感知した蕭軍は金劍嘯と具体的に東北脱出の相談をしている（蕭軍「未完成的構図」）。
- 35) 「最後の薪」に、商市街に越したばかりの生活が描かれている。「かまどの火がおこり、また消えた。もう一度やってみたが消えた。三度目だ。（中略）食事の仕度の時、薪は一本しか残っていなかった。一本の薪でどうやって火がおこせる？こんな大きなかまどに一本の薪、かまどの二十分の一にしか

ならない」。しかし「こそ泥車夫と老人（小傭車夫和老頭）」では郎華と吟が車一杯の薪を買い、雇った二人の老人にその薪を挽いてもらったことが書かれている。老人たちは、薪を挽いた駄賃から吟が振る舞ったパン代が引かれていないことに気づく。『「奥さん、駄賃が多すぎます」／『どうして？ 多くないわ、七十五銭でしょう？』／『奥さん、パン代が引かれてねえんで！』その僅かの駄賃を老人はポケットに入れもせず、まだ手の上に載せたままだった。彼は遠くの門灯の明かりで金を数えていた。／『パン代は要らないのよ、取ってちょうだい！』／『ありがとうございます、奥さん』恩義を感じているように二人は帰って行った。パンを食べられたのは私の恩情だと思っているのだ。／私は恥ずかしさのあまりたちまち胸が熱くなり、その二人の背中をずっと見つめていた。羞恥の涙が流れ落ちた。もう祖父の年齢なのに、パンを食べたくらいで恩を感じるなんて」

- 36) 『「君が行けよ！君が行け、俺は行かない！」』『いいわ、私が行く。喜んで質屋に行くわ。質屋に行くことなんか何ともない、正々堂々と行くわ』新しく作った私の綿入れ、一度も袖を通していないのに、私と一緒に質屋に行くことになった！質屋の入口で暫くウロウロした。家を出る時郎華が、二円でなきゃだめだ、と値を付けたことを思い出していた」（「質屋（當舖）」）。
- 37) 蕭軍は「蕭紅書簡第二十一信注」に、生活が苦しかった時、黄田が経済的に援助してくれ、自分たちがロシア語を学ぶための学費も援助してくれた、と書いている。
- 38) 注33参照。
- 39) 蕭軍は「蕭紅書簡第二十一信注」に、哈爾濱脱出の旅費は黄田が一手に引き受けてくれた、と書いている。
- 40) 蕭紅のペンネーム「悄吟」からか。
- 41) 徐志であろう。
- 42) 原載は《文季月刊》一卷三期（1936年8月1日）。
- 43) 二人は6月10日に商市街の家を後にし、11日に汽車で哈爾濱から大連に向かい、14日、大連から青島に向かっている。詳細は「蕭軍・蕭紅の東北脱出」を参照されたい。
- 44) 恐らく大家の息子の汪玉祥であろう。
- 45) 「同じ運命の魚（同命運の小魚）」に「大家さんの所の女中、小菊が叩かれて塀の隅で泣いている」という記述がある。
- 46) 「悲しみを胸に私たちは台所を検査した。水を入れる壺、桶、鍋、こういったものは皆売ることにした。でもこれは初めての検査ではない。行こうと決めたその日から、私は台所に来て算盤をはじいた。三十銭、二十銭、何度こうやって計算したことか。でもそれは結局『行く』と言われたから胸算用したままで、今日は本当に売ってしまうのだ。古道具屋が外で待っている」（「家具を売る（拍賣傢俱）」）。これらの品の多くは、引っ越しのその日に郎華が調達してきたものだった（「引っ越し」）。
- 47) 「鍋は次の日の朝、料理に使った。これが最後だ。私は悲しかった。明日この鍋は私たちと別れ、別の人の家に行くのだ！二度と会えないのだ！私たちの鍋。米の買えなかった時、私たちはこれにお湯をいっぱい沸かして飲んだ。米がほんの少ししかない時、おかゆを炊いてくれた。もう行ってしまうのだ！苦難を共にしてきた鍋よ！私たちとの別れが悲しくない？」（「家具を売る」）。
- 48) 「病氣（患病）」に、春の息吹が感じられる頃、吟が突然腹痛を起こし、一週間以上起き上がれなかったことが書かれている。また続く「十三日（十三天）」では、出発まで一ヶ月もなくなった頃、吟が病氣療養のため、十三日間友人の家に滞在していることが書かれている。
- 49) 商市街を出た蕭軍と蕭紅は金劍嘯の天馬広告社に行き、そこで友人たちと別れの一夜を過ごしている。中央大街の東側にそれとほぼ並行する尚志大街があり、その二本の通りを繋ぐ細い道が何本かある。それらの道には北から南に向かって「西頭道街」「西二道街」と順に名前が付けられている。注2で述べたように商市街は西五道街の向かいを入った所、天馬広告社は西十五道街にあった。駅はその更に南である。